

嬉泉の新聞

- 嬉泉の新聞／第30号／1995年（平成7年）3月発行（年3回発行）
- 発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋 1-30-9（〒156）
TEL 03-3426-2323
- 発行人＝石井哲夫 • 編集人＝友田篤

「社会福祉の世界に仲間入りして」

小林 隆 児

大学を卒業後13年間私は在籍した医学部から7年前に教育学部へ、そして昨春からは現職の福祉の世界へと転々としてきました。この頃では医学の世界にいると居心地の悪さを感じるほどになってしまいました。自分の歩んできた道を振り返ると、まるで障害を持った子どもが最初に医療の世界で治療を受け、学校に入って教育を受け、卒後は福祉施設のケアを受けるようになっていく人生の歩みと同一歩調をとって今日までやってきたようです。実際、私が長年お付き合いしてきた子ども達への発達援助を考えていくと必然的にそうなるわけですから、自分にとってこのような歩みはなんとなく宿命的なもののように感じられるのです。

教育と福祉の世界の両方に多少なりとも足を踏み入れてみますと、外から見ていたのでは到底分からないようなことを教えられます。教育の世界はそれなりの学問的な歴史を有していますから、かなり既存の制度や理念という枠に縛られているという思いを強く印象づけられました。教育関係者にはどことなく聖職者意識と強い使命感に縛られ随分と肩に力が入っている人が多いように感じました。どことなくこうあるべきだといったドグマが支配しているようなところに違和感を抱いていました。それに比して福祉の世界はまだまだ学問の形を成していない、暗中模索の混沌とした世界のように思いました。

福祉の世界は障害児者の生活総体を世話し援助していくことを基本としていますから、どろ

どろとしていてあまり学問的な世界には馴染まないようなところがあるのは仕方のないことかもしれません。

ただ医学、教育、福祉の各々の世界に身を置いてみて痛感したことは、いかに相互に相手の世界のことを知らなすぎるかということでした。同じ日本人であるにもかかわらず、お互いの用語が相手に通じなかったりすることはざらですし、正直いってどうもお互いが積極的に交流を求めているようには感じられませんでした。

どうしてそうなのでしょう。理由はいろいろあるでしょうが、一番の理由は、各々の活動の基盤となる学問の世界で相互の交流を求めていかなくてどうにもならないという必然性がいまだ乏しいからだではないかと私には思われました。障害児を人間総体として、共同世界の仲間としてとらえて理解していくという枠組みがいまだ各々の世界には生まれていないからではないでしょうか。

そんな思いを抱きながら、これから取り組まねばならない社会福祉の世界では、いままで十分に理解できていなかった障害を持った人々の生きざまに直接肌で接しながら、今までの狭い枠組みから少しでも脱皮していくことが、これからの障害児者療育を考えていく上でとても大切な課題であると私には思えるのです。

（東海大学教授・健康科学部社会福祉学科）

創造的福祉施設処遇論

社会福祉施設をめぐるホスピタリズム論争が展開されたとき、当時の乳児施設関係者は、これを肯定し養護技術実践にエネルギーを注ぎ始めた。社会福祉施設の積極性について考えると社会福祉施設には、そのままでは、養護効率性から考えて、個別的な親子関係を補填するようなことは不可能と考えられる。しかし実践経験者は、人間関係が集团的に機能する効率性を体験するのである。一人一人に注がれる職員の養護努力は、家庭における母親のそれに及ぶべきものではないが、一人の子どもに注ぐ愛情がそばで見ている他の子どもにもよい影響があるとということも分かってきている。自閉症児が集団状況に入れないが、集団状況に入れた子どもは、急速に指導者の意図を理解する状況になっていくことが分かるのである。このような集団教育の増幅的效果として一人の人に注ぐ愛情も見ている人に観客効果をもたらすことが分かってきた。そこから集団養育技術の創造が認められることになるわけである。

集団養育技術に関して、かねてから私は、積極的養護理論を展開

してきた。社会福祉施設という人工的な仕組みの中で、対人援助を積極的に行うためには、社会福祉施設で働く職員の目標と方法に関する理解が必要になってくる。社会福祉における古くて新しい問題は、人に対するサービスの提供という概念である。このための目標や方法に関しては、きわめて未開拓であるといふ言いがたい。社会福祉施設と宗教との関係は、古くからあるが、慈善事業が宗教者の献身的なサービスによって成

施設経営の創造性

(その二十一) 石井哲夫

り立ってきたことで、それこそ奇特なことであった。慈善というすべてこれを排除しようという考えがあるが、ボランティアズムという人のために尽くすということこそ社会福祉の最重要徳目として重要視していかなければならないと思っ

ている。徳目としては、これを愛情論としてアガペーの愛としか言

でのサービスというものが、自然に職員に分かってくるものとして、各自の自発的な研鑽に委かされて

情論としてアガペーの愛としか言いようがないのは困ったことで、新しく社会福祉施設で働くこととする職員の訓練課題として敢えて提出したわけである。

古くから教育的な効果としての、愛を注ぐ善意の営みによって、援助者が浄化されてくることを高く評価している。社会福祉施設こそは、利用者が求める信頼関係をできるだけ早く確実に結ぶことのできる組織体として構成していかなければならない。人工的に行っている社会福祉援助が、人間の徳目に触れる思想信条の集团的な発信基地としての施設において初めて有効になされるはずなのである。しかるにボランティアズムを失っている施設がこの考えとはほど遠いところに位置していることを知る

ので、今こそこの壮大な人間援助基地の効用を世に問うときではないかと考えているのである。

私たちが職員研修において、感じてきたことは、この徳目に沿った基本的な学習を考えず、知識技術に偏りすぎていたことである。

若い人たちが社会福祉に進んできている初心を常に大切に喚起してもらおうことと、利用者の援助が必要な状況に気づくことを求めたいのである。そこから今自分が直面しているこの仕事の真の価値や自分自身に気づくことにもなるのではないかと考えているのである。